

Title	アーザル・カイヴァーン学派研究7 : Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukhtの写本蒐集と翻訳校訂
Sub Title	A study of Āzar Kayvān school 7 : collecting and editing MSS of the Dāstān-e Mōbedān Mōbed
Author	青木, 健(Aoki, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.53 (2022. 3) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000053-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーザル・カイヴァーン学派研究 7

— *Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂 —

青 木 健

本稿の研究対象は、*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* と題された近世ペルシア語文献である。本稿は、下記の一連の研究の続編に当たる。

青木健 2015年a: 「アーザル・カイヴァーン学派研究—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂—」、『東京大学東洋文化研究所紀要』(第167冊)、pp. 348 (157) - 302 (203)。

—— 2015年b 「アーザル・カイヴァーン学派研究 2—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂—」、『東京大学東洋文化研究所紀要』(第168冊)、pp. 147(174) - 77(244)。

—— 2016年 「アーザル・カイヴァーン学派研究 3—ポスト・モンゴル期のイスラーム思想史に於けるアーザル・カイヴァーン学派—」、『東京大学東洋文化研究所紀要』(第169冊)、pp. 184 (379) - 97 (466)。

—— 2017年 「アーザル・カイヴァーン学派研究 4—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂—」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』(第48冊)、pp. 9-31。

—— 2018年 「アーザル・カイヴァーン学派研究 5—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂—」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』(第49冊)、pp. 1-19。

—— 2020年 「アーザル・カイヴァーン学派研究 6—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂—」、『慶應義塾大学

言語文化研究所紀要』(第51冊)、pp. 1-16。

この文献の新出写本と、ゾロアスター教研究史上及びアーザル・カイヴァーン学派研究上の位置付けについては、青木2015年aと青木2016年を参照。§§1-27の校訂については、青木2015年bを参照。§§28-30の校訂については、青木2017年を参照。§§31-34の校訂については、青木2018年を参照。§§1-12の日本語訳については、青木2020年を参照。本稿では、§§13-28の日本語訳を提供する。

Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht va Keyfīyat-e Ū 翻訳

第13章：芳香 (būy) と意識¹²⁸¹と叡智 (kherad) に関しては、それらの場所は脳 (demāgh or 鼻 damāgh) と頭にある。その根拠は、頭に損害や傷が頭に達した者は誰であれ、理性が彼より去ってしまう点にある。理性と芳香と意識は、社会規範が行ったり来たりすると、風の様態 (kiyān-e bād) に沿って、このように協働者となる。そして、肉体の中を行ったり来たりし、肉体と1つの場となるまで [行ったりきたり] する。それらが真実在 (ḥaqīqat) となる [神と一体化する] か、肉体から離れた時、肉体は死ぬ。

第14章：章。善と悪は、どの時間によって為されるのか？ 人の肉体に、どのように到達するのか？ 雄と雌はどのようにあるのか？ 1匹生む場合もあれば、2匹、3匹生む場合もあるし、4匹、5匹もある。また、どのくらいの動物が乳により養われるか？ どのくらいの動物が乳により養われないか？ 妊婦の死は何によるのか？ なぜ雄は生まれるのか？ なぜ雌は生まれるのか？ という問いに対して。

回答。芳香 (būy) とフラワフル (frawahr) と意識¹²⁸²と霊 (ravān) の場所は、頭の髄 [脳] であることは前に述べた¹²⁸³。そして、雄の卵の場も頭の髄

1281 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1282 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1283 13段落の冒頭 (folio 54 rの上から3行目) を指すと思われるが、その箇所では「芳香

[脳]である。雌の意識や霊 (ravān) やフラワフル (frawahr) は、頭の髄 [脳]にあるが、卵は膀胱の中にある。雌は交わりにより、より近く、より貪欲になるためであり、女性の発情 (mastī) はより近しくなること [で起きるから] である。雄の耽溺 (ghurūq) は¹²⁸⁴、雄の水 [精液] が頭より背中に達し、結合 (peyvaste) の耽溺に至る。男の中に火を宿らせ、体全体に行き渡させるのは、女悪魔アーズ (Āz) [ゾロアスター教に於ける欲望の女悪魔] である。その耽溺は、熱が生じ、活力 (quvvat) と快活 (neshāt) が漲り、体全体に達した時、陰茎と睾丸の中にあり、快樂 (rāmesh) と幸福 (khorramī) は頭にある。

アーズに関して言えば、その在り処 (mā'vā) は脳の中である。その場から、耽溺へ来て、女性の卵の在り処である膀胱へ来る。男と女が互いに達し合った時、7惑星 (setāregān) 回りの運勢が、その場所へ見に来て、それらは記録される。男と女が卵を交換している時に、善と悪が人々に訪れたら、幸福 (sa'd) は近く (nāzer)、不運 (nahs) は遠ざかる。1000の人間が敵に剣を抜き、敵が何もできなければ、この時に子どもが現れる。幸福 (sa'd) と不運 (nohūs) は、「在り処の生まれる場 (Masqat al-mā'wā)」の運勢により、生誕 (velādat) から死までの時間—始めとそれ以外 (dīgar) —に定められている。

精液が放たれ、[女性に] 受け入れられる間、男性の卵は精子のようであり、女性の卵は卵子 (hūresh) のようである。男性の卵と女性の卵が一つになる度に—それより前でも後でもなく—、雌の卵は「一つの場」(anjāyegāh) に蓄えられ、男性の卵はその先端に落ち、血となり、女性の体を増加させる。男性の卵が女性の卵より到達が先であれば、その男性の卵の半分は女性 [の体] を増加させる。卵を受け入れる「場」は「孔状のもの」(cheshme

bū と意識 ūsh (hūsh) と叡智 kherad」となっている。同様に13段落冒頭では demāgh va sar 脳と頭という表現を使用しており、ここでの maghaz (脳あるいは髄) という語は用いていない。

1284 写本では ghurūf غروف となっているが、以降の文脈から ghurūq غروق (耽溺) ととる。

cheshme) である。

男性の卵と女性の卵が、それぞれ孔の1つに落ちると、1人の子を妊娠する。もし2つそれぞれが2つの孔の1つ1つの場に落ちれば、2人の子〔の妊娠〕となる。3つの孔に落ちれば3人の子を孕む。象や鹿といった1匹を産む4つ足の動物は、卵の周囲において孔が1つしかないゆえに〔産まれるのは〕1匹だけである。

妊娠の死〔不妊〕(marg-e ābestan) は以下の原因による。孔においてその場 (jāyegāh) が完璧でなく、破れていて、血が強く出て、その場に保つことができない。これが、妊娠の死〔不妊〕(marg-e ābestan) の理由である。

第15章：男性と女性について質問されたもう1つの節。風が行ったどんな場 (jāyegāh) でも、フラワフル (frawahr) がより多くなり、「産み」の場に落ちる卵は、最初破られ、40日間のうちに3度回転する。卵は明るくなり、血と乳も分離され、卵は明るくなる。濃厚なものは¹²⁸⁵は血と肉となり、明るいものは乳となり、子どもがそれから食べる (khūrshan) のは卵である。卵と濃厚なものは、右に落ちれば男性となり、左に落ちたものは女性となる。〔妊娠する〕女性が、右目がより小さければ息子になり、左目がより小さければ娘となる。息子は背中が母の腹の方にあり、娘は背中が母の腹の方にある。そして、誕生の時にあって、風は毛のない子 (chore) 〔赤ん坊〕になって胎児を変える。息子は相まみえる時〔出産の時〕、うなじが見え、娘は顔 (dīm) ¹²⁸⁶が早く見え〔娘は顔を表に向けて胎内より出てきて〕、息子は遅く見える〔息子は顔を裏にして胎内から出てくる〕。

第16章：母から分かれた人間は、その食べ物 (khūrshan) は乳であるが、鳥たちは乳なくしてどう生きるのかという質問に対する章。人は産まれたら、彼らは2年半—それより少なくかそれより多く—乳を飲まなければならぬ。鳥たちは、卵の中にいる間、彼らの乳は〔卵の〕白身であり、黄身は

1285 MünchenとNavsariの異読に従い、غليظ にとる。

1286 MünchenとNavsariの異読に従い、ديم にとる。

肉となり、白身は乳となり、それにより鳥たちは生きて、その白身を食べる、卵から出てきた時は、2年半ぐらいになっているのであり、[従って] 彼らに乳は必要ではない。

第17章：以下の質問に関する章。水を飲む鳥¹²⁸⁷は、卵から出てくるが、他は、生き物ではない [ものがいる] (dīgar che ānke dād na jānvar ast)。火、水、気、植物、そして水によって生きるものと、乳によって生きるもの、その他のもので生きるものなど、以上の者らは「水飲み (ābnūyesh)」ではないが、雄性・雌性が混じり合っている。いったいどちらの実体で生きているのか？ また、多くの生物が有している芳香 (būy)、意識 (hūsh) ¹²⁸⁸、フラワフル (frawahr)、知性 (kherad) は、これらの者においてどのようにあるのか？ これらは、生まれながらの「水飲み (ābnūyesh)」ではないが、いづれでもない何ものかに由来するのであろうし、また「水を飲むこと」によって [そのように] なるということでもない。また、多くの生物は、これらのように手と足を持っている。

答えて曰く。知るがよい。鳳凰 (Sīmorgh)、大鷹 (Bāz)、隼 (Shāhīn)、セーカーハヤブサ (Charkh) などの肉食の鳥は、卵に由来して「水飲み (ābnūyesh)」である。彼らの「水飲み (ābnūyesh)」といえは、やはり風 (bād) に由来する。母の腹の中の子供が風により生きるように、鳥の雛は卵の中で風によって生きる。知られている限り (tā dānand)、風がそれ [雌の胎内の子あるいは卵の中の子] に再び取り込まれると、2つそれぞれ [胎内あるいは卵] は有用でなくなる。

第18章：火、木、植物、その他の生けるものに関し、「生 (zende)」の状態の由来に関する質問の章。知るがよい。それら [火、木、植物、その他の生けるもの] には「冷」と「湿」の実体があり、創造された時に「熱」と

1287 後に出てくる[گوشت خواره گوشت خواره (肉食)との意味の関連を考え、آب انبویش を、آب (水) + نوش (動詞「飲む」の語根)を組み合わせた造語として解釈する。

1288 MünchenとNavsariの異説に従い、هوش にとる。

「乾」とが到達し、生えてくる。人やその他の動物が産まれるのは、冷たく湿っている女性の卵の水と、温かく乾いている〔男性の〕水からである。それら2つがそれぞれ作り手となり、且つ芳香 (būy) の風 (bād) が届けば、存在者 (mowjūd) となる。例えば、もし葉が出ているのを摘み取るか、あるいは木から落ちたものを取って—その時は葉は冷たく湿っている—、それを手に取り、握りしめる。そして温かさと乾きがその人の手より葉へと届く。そして風になびくと、温かさと生 (zende) は葉から外へ出てしまうのである。

魂が与える物は、総じて風による。芳香 (būy) と意識 (hūsh)¹²⁸⁹と叡智 (kherad) は、いずれも風の実体 (jawhar-e bād) である。それらがそれぞれ少なくあるいは多く一緒になって達すると、「水飲み (ābnūyesh)」が、それらから現れる。もし手や足が多いのであれば、それらはそれらから目にみえる形で現れるというようなことはない。目に見える形で現れるそれらは、火がそれらに達すると滅してしまう。もし水から目にみえる形で現れる場合、水がそれらに達しても滅しない。もしそれらが他の実体から現れるなら、悪い実体が達しても滅しない。

第19章：生き物たちが知ったり、食べたり、眠ったり、寝言を言ったり (khvāb koftan)、聞いたり水を飲んだりといったことは、どこから来るのか、また眠りはどのように人間の体にやって来るのか？

答え。木と植物は、土、水、空気、火から健全さと増加を為す。同じように人間は、魂 (jān) から健全さと増加を為す。魂の糧は食べることであり、それは正しい本性 (tabāyi‘) として有しており、それが「食べる」ということである。「視覚能力」の場は目にあり、「聴解能力」の場は耳であり、水を飲むのは体へと、性質と味は口から、発話は舌からである。今ここで言及した糧の全ては、総じて芳香 (būy) であり、「ハサネ・イトウリーン (ḥasan-e eṭrīn)」〔アラビア語だが、語義は不明〕と呼ばれる。芳香は羽のように見え

1289 MünchenとNavsariの異説に従い、هوشでとる。

る。意識¹²⁹⁰は魂と体に覚醒 (āgāhī) を与える。芳香 (būy) は、人体の穴、人の器官 (andām)、肉体の中にある場 (jāyegā-ye-hā) にある。総じて、人の行為・所作は、火と水からなる芳香 (būy) による。

もしそれ [芳香] がだめになったり、あるいは傷や棘 (khāri) がその「場」の中にあるそれ [芳香 (būy)] に達したら、人は立つことができない。行為・所作は、意識¹²⁹¹の中にあり、意識¹²⁹²の糧はそれ [芳香 (būy)] である。意識¹²⁹³と芳香 (būy) は互いに友であり、一緒に互いに逃れられない。どちらか1つに困難が生じると、器官全体が痛む。それぞれ名前は別である。人体の器官がだめになった場合、器官に働きかける行為と糧の芳香と意識¹²⁹⁴は何もできない。

第20章：我々が夢 (khvāb) と呼び、貴方がたが「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」 [本来は、ゾロアスター教の怠惰・睡眠・二度寝の女悪魔。手が長く、夜明けに襲来するとされる] と呼ぶ「意識 (hūsh) ¹²⁹⁵」は、肉体に到達した時、どのようなのか？ その意識を見ているのか？ 意識、様態 (kiyān)、靈魂 (ravān) と肉体が、雄・雌・その他の肉体の中の動きを映し出されている夢を見ているのか？ 以上の質問に関する章。

答え。夢 (khvāb) は、アラビア語で「眠る」(khoftan) と呼ばれ、至高なる神 (Īzad) が人体の安らぎの為に創造した。夢は、体が休む為に人体に届く (khvāb chendanī ke be tan-e mardom rasād ke tan biyāsāyad)。

一方、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」は悪魔 (dīv) であり、大悪魔 (Eblīs) ¹²⁹⁶の苦痛 (patyāre) であり、3パターンで人の体に達する。うち1つは、影が人々の体の上に投げられる場合、うち1つは、[悪魔] 自身の体に

1290 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1291 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1292 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1293 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1294 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1295 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1296 MünchenとNavsariの異読に従い、ابليس だとする。

よって人の体に達する場合、うち1つは、人体に達し、眠る (khofte shavad) 場合である。影が人の体に投げられるとは、アラビア語で「悪夢 (kāburs)」と呼ばれる到来者 (āyesh) ¹²⁹⁷が人に落ちることである。

自身が人体に達すること、そして人を墮落させる (be-sū-ye ānke mī-bīnad) とは、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」が、「死の王 (malik al-mawt)」 [イスラームでは、死の天使イズラーイールの別称である] の所作であり、それはペルシア語 (be-Bārsī) で「Aste va yād nā-ye ūrtar」 [ゾロアスター教の死の天使アストー・ウィーザートか?] と呼ばれる。危害や傷が体に達した時、意識¹²⁹⁸や芳香は全ての器官にあるのだが、危害や欠陥が肉体に及んだ時、全ての器官になければ、少しはましである。全ての知識は、芳香と意識¹²⁹⁹と社会規範 (ā'in) と叡智 (kherad) による。

そのようなわけで、我々はまさに夢と呼ぶのであるが、それは芳香や意識¹³⁰⁰から見るのか、体の器官から届くのか? 体の中にない場合、意識¹³⁰¹は何も知ることはできない。芳香は天界的な者 (Mīnū'ī) であり、天界的な者からの知識は芳香に届く。天界的なので、以下のようなことをしばしば目撃する。夢の中にある人が遠くの見知らぬ街にいる。起きている時にその街には行ったことがないが、そういう街がある証拠を聞いたり、[夢で] 見たことが正しく真実であった。その街は、ひとえに「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」の中で見たのである。

また、芳香が天界的な者たち (Mīnūvān) だということも明らかである。それがなぜ明らかなのは、それら [天界的な者たち] は見えているのに、[物理的に] 「見る」という意味において、眼や頭では見えないからである。芳香が「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」を見ている時、体はその街にはない。また、夢の中での動き—笑い、泣き、性的な交わりなど—は、芳香

1297 MünchenとNavsariの異読に従い、آيش にとる。

1298 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1299 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1300 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1301 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

が見ているのである。

意識¹³⁰²については、意識が体に戻ると、何がいつ起きたかの知識を体を与える。人体に痛み、病い、恐怖が達すれば、無意識¹³⁰³ (bī-ūsh) になり、人体に何が達しようとも、体はそれから何も察しない。

この2つ [意識と芳香] が互いに不可分の関係という意味で、片方が体の中にあれば、片方は外にある。意識¹³⁰⁴が体の中にあれば、芳香は天界の者たち (Mīnūvān) から知識を意識¹³⁰⁵に与え、意識¹³⁰⁶が体に [知識を] 与える。もし痛みや重い病いが体に達したら、このように無意識¹³⁰⁷ (bī-ūsh) になるが、芳香と意識は体から出ては行かない。苦痛やその入り口 (āstāne) が体に達し、意識¹³⁰⁸が戻ってきた場合、その [苦痛の] 知識はやはりない。体には意識¹³⁰⁹がなく、様態の風 (bād-e kiyān) があるだけである。芳香と意識¹³¹⁰は時折、外に出てくる。

夢 (khvāb) の時、芳香は外に出てくる。痛みや重病の時、意識¹³¹¹が外に出てくる。病いが軽くなると、意識¹³¹²は自身の場へと戻る。夢が終わる頃に、[芳香] は意識¹³¹³の近くに返ってくる。

風の様態 (kiyān-e bād) が外に出てきた場合は、風の様態は場所に返ってこられない。その根拠は以下のようなものである。大抵の場合、誰かが夢を見ている時、誰か彼を呼んだ時、その人はまだ夢の中にいて、[呼び声を] 聞いて

1302 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1303 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1304 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1305 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1306 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1307 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1308 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1309 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1310 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1311 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1312 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1313 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

いるが、夢から起き上がれない¹³¹⁴。その理由は、芳香がまだ体に戻って来ておらず、遅れて戻ってくるからである。風の様態 (kiyān-e bād) は、体から外に出てくる。芳香と意識¹³¹⁵と風の様態 (kiyān-e bād) は一つとなり、天界の存在 (Mīnū) となる。

第21章：以下の疑問に関する章。このように見ている人が天界的であるなら一貴方がたは天界的な者からはいかなる嘘も来ることはないと言っているが、なぜ夢 (khvāb) の中で見ている人は目覚めている状態になく、他の状態にあるのか？ この嘘 [の状態] は誰に由来するのか？ というのは、神の実体に正しくないことはないからである。もし天界的な者が見せていて、神と天界的な者たちがどこにでもいる悪魔たち (dīvān) を唆せるなら、この理由で神の御業には不思議なことがあるのであろう。悪魔が見せず、神が [自ら] 見せるというのなら、何の益があつてのことなのか？ どんな益を見せているのか？ このようなことは正しいのか？ 嘘なのか？

答えは以下の通りである。前にも言ったように、そのようであるとは、その人が見ている状況であるが、まさにその人が見ているのである。そして、このことも知るがよい。いかなる苦痛 (patyāre)、疑心 (gamān)、悪行 (bad-kardārī)、嘘 (dorūgh)、無知 (kam dānestī) も、星々の高みの上にはない。天空と星々の下にあるもの、悪、疑心、苦痛が彼に達するのである。そして、正しくないこと、疑心が、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」に落ちてくる。これは、以下のようなことである、すなわち、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」を見ている人が汚染され、苦痛 (patyāre) の場にいる。より善くある神的で天界的な者 (Mīnū'ī-ye Yazdānī) は、それを善き天界的な者 (Mīnū'ī-ye beh) に見せ、そのより善き者がより善き天界的な者を見せるのである。

天界的な者 (Mīnū'ī) の説明は、以下の通りである。それは目や頭では見えず、アラビア語で「ルーヒーヤーニー (Rūhiyānī)」と呼ばれる「アムシ

1314 Münchenの異読に従い、خاستでとる。

1315 MünchenとNavsariの異読に従い、هوشでとる。

ャ・スプンタたち (Ameshasfandān) [ゾロアスター教の六大天使] である。より善き天界的な者と、その天界的な者に対し、より天界的な者は目や頭では見ることができない。このように見ることの益は、男に達する「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」で女人を見せることで、[男が性的な意味の] 耕しを行い (ke-abadān konand)、正しく且つ善き天界の者が見せるものを崇拜するようになる点である。善き天界の者は一貴方が証明しているよう—正しくないことを見せるのであり、[普通の] 天界の者は悪魔 (dīv) —遠くあれ、控えよ—の悪を見せるのである。

知識の主たち (khodāvandān-e dānesh) は宗教に関して、以下のように言っている。人が欠損 ('ellatī) の状態にあったり、病気の状態であったり、あるいは体に害を与えるような食べ物を食べたような時のどんな「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」も、天界の最も良い「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」であるだろう。つまり悪魔をより多く見せる。もし欠損に満ちた、怖れに満ちた、泣いてしまう、喉が渇くといったように尋常でなく就寝する時、全ての罪業を悔い、「神の名、アムシャ・スプンタたち (Ameshasfandān) の名において」[の祈り] を行う。[もし] 自身のうちの憎しみ、嘘、不正を恐れ、欲情を、怒りを恐れ、体を洗い、衣服、場所を恐れるのなら、「神の名、アムシャ・スプンタたち (Amshasfandan) の名において」と唱え、頭を枕の下に置き、その夜見た「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」は、正しく、真なるものとなれば、相異 (tafāvot) の原因は少なくなる。私が言ったこの習わしを実行できるのであれば。

第22章：体の中にある芳香、意識 (hūsh) ¹³¹⁶、風の様態が見られることに関する問い。もしそれらが、もし体の中にあり、あるいは眠りの状態にあり、そこから目覚めた時、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」で何を見たかを伝え得る意識が体にあるということは、ありえない。「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」で何かを見ているなら、半分寝ていて、半分目が覚め

1316 MünchenとNavsariの異説に従い、هوش でのとる。

ているということなのか？

答えは以下の通りである。こう見ることに關しては、既に多くを述べた。さらにその上改めて再び述べる必要もあるまい。芳香、意識 (hūsh) ¹³¹⁷がある人は眠っていないし、そのような人は、その実体において苦痛 (patyāre) がない。

第23章：この状態を見ているこの「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」は誰なのかという問い。体にあるこの目が見ていて、それでいて目は眠っているということは？ 2つの種類の目が見ていて、一方は眠っていて、一方は目覚めているというのにはあり得なさそうである。2種類の目が見ているなら、人の体の耳、舌、手、足、全ての器官、人の体の中にある様々な部位、全てに2種類がなければならない。目覚めている時の目のように。

以下のことを問う他の人々への回答である。「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」で見たものを記憶とともに体に持ってくる者は誰なのか？ 体にその知らせ (āgāhī) を与える者とは？ 生まれた時、子どもの時は見たとしても、いかなる記憶も [体に] 持ってこられないのではあるが。

今まで言ったことに加え、さらに知るが良い。目の中の「見ること」、体の器官、手、足、耳、舌、その他は、総じて覚醒状態にあり、芳香 (būy) と意識¹³¹⁸の中にある。芳香 (būy) と意識¹³¹⁹があるべき場所 (jāyghā) にない場合、それら器官は機能しない状態 (nā-kār) となる。力 (quvvat) がその場所になければ、それら [芳香と意識] から働きや行為は発生しない。ある諸器官が壊れていない状態でなくとも、他の諸器官が正常な状態においては、それら [芳香と意識] がその場所へと戻ってきた時、その特性そのものをその場所へと持ってくる。体の諸器官 (ālat) 全体は、芳香 (būy) と意識¹³²⁰のように、寝ている時も起きている時も活動している。

1317 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1318 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1319 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1320 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

他 [の回答]。生まれる時の知識の記憶が戻ってこないことに関して。その理由は以下のとおりである。芳香 (būy) が意識¹³²¹とともにあり、意識¹³²²から体へと、意識¹³²³と叡智 (kherad) によって、神 (Īzad) 一偉大にして峻厳たる一を見るに至るという知識は、天賦の卓越さを有する人間の為のものである。呪われしアフリマンの称賛に値する叡智は、子どもの時に届く。子供にペルシア語 (be Pārsī) で聴解能力 (gūsh) と朗唱能力 (sorūd) と叡智 (kherad) と呼ばれるものを教えると、呪われしアフリマンがこの称賛に値する (āstī) 叡智の一部を子供たちに称賛するが、しかしながら全部を称えることはできない。その根拠は、この子供が耳、目、舌など全て有していて大人になった時、幼児期や乳児期に何をしていたか、何を見ていたかを思い出出すことはできない。それ故、知識に基づいて知覚することができる称賛に値する (āstī) 叡智は、学ぶことで獲得する知識より劣っているのだろう。体に称賛に値する (āstī) 叡智と聴解能力 (gūsh) と朗唱能力 (sorūd) が完全でない場合は、意識¹³²⁴と芳香 (būy) はその中にはなく、何かを体に示されても、大きくなるまでは知覚できない。

我々の思い出す [ことのできる] この叡智は、獲得的叡智 (kherad-e ektesābī) が生得的叡智 (kherad-e gharīzī) によって得られると、2つの叡智が互いに働き合って彼 [子供] に届くようになる。この生得的叡智が多い人ほど、獲得的叡智をより多く学ぶことができる。その証拠は以下の通りである。学習に困難をきたす人がいて、教師たちが彼らに知識を教えても、いかなる種類のことも学べない。これは、呪われしアフリマンがより多くの良い生得的叡智を持っていてしまい、少ない要素が残されるからである。多く要素が残された人は、少ない教育で、少ない日数で多くの教養を身につけ、知識を学ぶことが、[要素が少ししか残されていない] 彼らより容易い。呪われしアフリマンは、彼から生得的叡智を少ししか持ち去ることができず、

1321 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1322 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1323 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

1324 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش でのる。

多くが残されるからである。その人は完全で益のある知識を得、学ぶことができる。

その生得的理性により、善き天界の意識¹³²⁵と芳香が体に示されて知り、生得的叡智によって体に示され、それに基づいて知識が到達したその時に、働きが生じる。その論拠は、もし誰かが酒を多量に飲み、意識¹³²⁶と芳香が彼からなくなり、[その後]素面の状態になり、彼が酔ったと知らないことがある。もし酒を少なめに飲み、意識¹³²⁷と芳香がその場所にあった場合、素面になった時、何を行ったか分かっている。このように、たくさん酒を飲むことは、意識¹³²⁸と善き芳香を持って行ってしまふのは明らかである。

第24章：以下の問いに関して。芳香 (būy) と意識¹³²⁹が体がない [場合]、「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」の状態であれ、目覚めた状態であれ、芳香と意識¹³³⁰を目に見えるようにはできない。意識¹³³¹が戻った時、意識¹³³²のない時に自身に何が起こったか少し知っている。体が死んだ時の [天国での] 歓び¹³³³、のどかさ、穏やかさ、快適さ、地獄の責苦・苦痛について、体がそこにはないのに、なぜ言及できるのか？ [もし] 体がそれら [天国の歓び、地獄の苦しみ] を知っているなら、それらは体、あるいは霊 (ravān)、あるいは意識¹³³⁴、あるいは芳香 (būy) いずれに届くのか？

回答。芳香 (būy)、意識¹³³⁵、霊 (ravān)、叡智 (kherad)、働き (kār)、行い (kerdār) がどのようなものであるか、これらについては既に述べた。天国の歓

1325 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1326 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1327 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1328 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1329 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1330 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1331 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1332 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1333 Shadi شادی にとる。

1334 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1335 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

び、地獄の責苦、これら全ては、芳香 (būy)、意識¹³³⁶、叡智 (kherad) へと届けられる。穏やかさ、快適さは、全て意識¹³³⁷、芳香 (būy) へと届けられる。これは、体にはそれに由来する偉大さ (āzarmī) があるということである。魂 (jān) が肉体から離れると、先に述べたとおり、骨は残るが、四つの本性 (tab‘) 全てが、再びそれら自身の場となる (shavand)¹³³⁸、水は水と一緒にになり、火は火と一緒にになり、風は風と一緒にになり、土は土と一緒にになる。芳香 (būy)、意識¹³³⁹、全てのフラワフル (frawahr) は1つになり、それは靈魂 (ravān) と呼ばれる。全て [肉体] は芳香 (būy)、意識¹³⁴⁰、靈 (ravān) の道具である。「世界 (gītī)」の卑しさとのどかさ、悲しみと罪業と報いと行いは、それら [肉体] である。

第25章：問い。それら [芳香 (būy)、意識¹³⁴¹、靈 (ravān)、叡智 (kherad)、働き (kār)、行い (kerdār)] のうち、どれが肉体を迷わせ、罪業を犯して地獄に達するのか？ どれが死から肉体を救済するものをなくさせるのか？ 肉体に由来するこの死が、肉体から魂 (jān) を出させ、つまり肉体を死に至らしめ、魂と肉体を分離せしめるのか？ 一方で、肉体が病気になり、肉体に何の力も残ってなくとも、最終的にその病気が消え、肉体が正常になる時がある。肉体から病いを焼き尽くしたのか、何か他の実体が焼き尽くしたのか？

回答。母から産まれた時からの人間の天賦の素質 (deheshn) について、その総論は既に述べたが、至高なる神 (Īzad) が全ての人間に授る叡智 (kherad)、理性 (‘aql) と意識¹³⁴²、芳香 (būy)、フラワフル (frawahr) を存在せしめた。呪われしアフリマンは、私が言ったように、叡智 (kherad) を

1336 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1337 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1338 MünchenとNavsariの異読に従い、شوند だとする。

1339 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1340 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1341 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

1342 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش だとする。

少なく、あるいは多く獲得する。アーズ (Āz)、ワラン (Waran) —アラビア語で欲情 (shahvat) —、アルシャク (Arshak) —アラビア語で妬み (ḥasad) —、憎しみ、虐待、疑いは、天界的な者や大悪魔 (Eblīs) が人間に送り付けた他の者の所業であり、人間はこれらに基づいて欺かれ、至高なる神 (Īzad) の道から脱落し、アフリマンのよう (Ahrīmanī) になり、報いが処罰にとって代わられる。

至高なる神 (Īzad) は、人間たちを、ドルジたち (dorjān) が人間に紛れる (mumtazij) ことで、自身の管理下に置くことができるように創造した。だから、人間たちは悪魔の命令を容認せず、自身の肉体と霊 (ravān) を制御しなければならない。しかし、霊 (ravān) が自身の意識¹³⁴³を伴わない場では、自身の抑制の手綱を悪魔 (dīv) やドルジ (dorj) に与え、彼らが肉体と霊 (ravān) の上で活動的 (churre) となり、全て神的な (Īzadī) 天賦の素質が、その半分を差し引かれ、術なし (bī-rāh) となる。故に人間は、悪魔 (dīv) とドルジ (dorj) が肉体の中で術 (rāh) を得ないように、あの世のこと、天界のことに勤しまねばならない。また、それらの報いは天国にあるので、人間は自身の半分を道へ引き寄せることはできない。

人間に病いが達すること。人々は生きることに絶望したり、あるいは病気が消えて、焼き尽くされることもある。これは、呪われし大悪魔 (Eblīs) が常に人間に対し、術 (rāh) を断たせたり、病気になるよう努めているのである。木や植物その他のものは、神がそれに苦痛 (patyāre) を付与すると、寒さや暑さは [それらを] 飲んだ時、苦く、鋭くさせる。2つの種類として、空気 (havā) は土に対立する。[大悪魔は] 対立を為す悪い実体¹³⁴⁴を育て、人間の中には病いが、空気へ対立するものが [生じる]。空気が為すのは1年において、春、夏、秋、冬のように、4つの種類となることである。湿って寒い冬、寒くも暑くもない秋、そして春。夏の性質 (tab‘) は、暑く湿っている。暑く乾いた夏である。このようなもののそれぞれ1つずつ、そして土より、医者がこれらから作り出した他のそれぞれの性質 (tab‘) が生じる。

1343 MünchenとNavsariの異読に従い、هوش にとる。

1344 Münchenの異読に従い、کوهريد にとる。

故に、アラビア語で中庸 (e‘tedāl) と呼ばれることを堅持すべきである。それがオフルマズド (Ūrmazd) の教えである。アフリマンの欺瞞から遠ざかることを遵守すべきである。欺瞞はアフリマンの教えである。それで病いは消え、病いの状態、肉体は正常になる。そのことについては既に言われている。医学、薬学、天文学は、病人が治るようにでなくてはならない。

第26章：死に関する問いの章。死はアフリマンが肉体自身に為すのか、それとも誘惑する者たち (eghvānān) が為すのか。為すのがアフリマンでないなら、風 (bād) と魂はどのように体から外に出るのか。木や植物はそれぞれ人間のような「死な」のか、あるいは他のような死なのか。

知るが良い。死はアフリマンが与え、それが人間に届く。どんな人であれ、自身に与えられたものは承諾しなければならない。前述のとおり、[アフリマンは] 人びとを恐怖で満たし、自身をより多く、最も良い状態で流布させる。アフリマンとともに力を発揮し、動物の体とともにあるドルジがどれだけか見よ。これらの総体のうちの一部がドルジ的であり、それは熱 (tāb) と呼ばれている。これは死の兆候であり、最期の時にこの熱 (tāb) が達し、その熱 (tāb) が人の体の上に達し、高熱 (garmī) となる。害を為す者、アフリマン、アフリマン的なものは、到達したところはどこでも破壊する。高熱 (garmī) は外から人間の体へと達するが、熱 (tāb) は人を病気にする。他のドルジは、18の悪魔と呼ばれている。肉体の風¹³⁴⁵は悪魔であり、たくさんの時ならぬ風は動物たちを失神させる。

「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」のドルジに関しては、既に述べたように、四つの種類で人間の体に達する。[Būshāsofのドルジが] 人間の体に達した時、肉体 (kālbod) は破滅する。死が人体に達すると、悪魔の「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」は血を滞らせる。つまり凍らせる。

悪魔の「夢を見ながら寝ること (būshāsof)」の協力者であるより悪い風は、体の中の穴、血管にあり、[体に] 拡散し、[体を] 振る。こうして体に

1345 بن باد بتون。

痛みと辛さが体に達し、その全ての器官 (andām) をナイフで切るようである。私が説明したドルジたちが、[人間の] 体に達した時、芳香 (būy) は恐れをなし、それは雌羊が狼を恐れるかのようなのである。そして、[ドルジは] 芳香 (būy) が体から外に出てきた時、心臓と胆嚢を取り、道を行ったり来たりする。生命が彼から出た時、悪い風は体の中に留まらず、火は血を溶かすことができない。無力な魂 (jān) は外に出てくる。体の中に行動する力、視る力、聴く力があるように、天界的な者は芳香 (būy) とともにある。悪い風は風の様態 (kiyān-e bād) をとるが、体から追放される。善き風は魂の監督者であるが、それも魂を取り、持っていく。そして体は倒れ、死んだ状態となる。

芳香 (būy)、意識¹³⁴⁶は、体とともに持っている恥じらいと親しみを、三日三晩体の枕元で待機させる。火が血を通らないように。生命の風は道を行ったり来たりし、体の中に [道 (rāh) を] 見つけ、芳香 (būy) は体の中に行ける。三日三晩経ったら、この体の中の天界的な者たち (Minūvān) は、先ほど述べたようにそれぞれ1つずつに名前が付けられる。それら全ては1つとなり、あの世へ行く。至高なる神 (Īzad) の道に行ったら、天国へ辿り着く。もし、罪業をたくさん犯していたのなら、地獄へ辿り着く。

霊 (ravān) はアラビア語でnafsと呼ばれるが、霊 (ravān) に関して説明 (tafsīr) すると、行ったり来たり、結合したり離れたりしている。母親から生まれた赤子の最初の時は、天界的な者たち (Minūvān) から肉体へ現れる。死ぬとあの世へと戻っていく。復活の時に、至高なる神 (Īzad) は慈悲をかけ、粘土に力を与え、再びそれを戻し、霊の状態であったものを、それ [再び土で造られた肉体] に呼び戻す。

第27章：死や人間に関する様々なことに関する質問。知るがよい。より善き風が全ての者の体に達する。木や植物に再び達したなら、善き風がそれら [木や植物] から出てくる。どんなに堅固な山であっても、ばらばらになる。

1346 MünchenとNavsariの異説に従い、هوش にとる。

そのことを我々は震えの土 (būm-e larz) と呼ぶが、それは人間の体において血が滞り、風が閉ざされ、やがて死に至るように、大地も山も木も植物にも当て嵌まる。大地の風の通り道を塞ぐのは苦痛 (patyāre) で、風は道を行ったり来たりできなくなり、外に出てくる時に力を出す [ようになる]。このような時、大地と山は震える。風がそこから外に出てくる全てのものは崩壊する。

肉体が死んだ時、風は風と一緒にになり、水は水と一緒にになり、火は火と一緒にになり、土は土と一緒にになる。復活の時 (restākhiḥ) [ゾロアスター教に於ける大復活] に、4番目の性質 (tab‘-e rābe‘e) つまり4種類の柱 (rokn) を至高なる神が王たち (molūk) から再び得る。つまりは水から水を、風から風を、火から火を、土から土を。そして [神は] 自身の「能力者性 (qāderī)」と「能力 (tavānā’ī)」によって復活を行う。霊 (ravān) は [肉体から] 去っていたのだが、再び天使に戻り、あの世界で、死のない、苦しみのない、満たされた状態となる。この注釈の書において、このことに関することは与えられた。

第28章：人々が天国と地獄へ連れていかれる時についての問い。その全てについて、誰に平穏や安らぎがあるのか？ 誰に苦痛や苦悶があるのか？ なぜ世界において身体は罪業を為すのか？ 天界の者たち (Minūvān) は懲罰 (padafrāh) を霊 (ravān) に届けるのか？ もし1つの罪業を犯すにつき、1つの罰を与える公正な調停者がいなかったり、罪業を1つも犯さず、徳のあることも1つもしなかった場合は、天国へ行くのか、地獄へ行くのか？

回答。霊 (ravān) は、体の中では大王 (Pādshāh) である。馬の背に乗った人間のようなものである。体は霊 (ravān) の命令によって仕事をする。もしこの世で正しい道を得、至高なる神が嘉し給うことを求めれば、天的 (ashū) すなわち天国的 (beheshṭī) である。もし既に言及した詐欺師たち (parīftārān) ¹³⁴⁷であるドルジ (dorj) たちが、彼に [自身を] 欺かせ、至高な

1347 MünchenとNavsariの異説に従い、فریفتارانととる。

る神の道から手を離せば、地獄である。更に、母親に由来する体には、アラビア語で「死の王 (malik al-mawt)」[イスラームでは、死の天使イズラールは、生前の善行・悪行を全て記録しているとされる]と呼ばれる記憶 (yād) が [ある]。神の下僕 (bandī) が、彼 [死の王] のところへ落ちるのである。そして、[体が] この世界において報いを為し、罪業を控えれば、その人間は彼 [死の王] のところから立ち上がり、天国へ達する。そうでない場合、即ちこの世で悪行を為す者のように、もし罪業を為した者が死んだ時、まさに同じように、その行為を為した神の下僕 (band) を地獄へ連れていく。善行は天国、悪行は地獄というのは、それぞれが人々に示すのである。天国と地獄は容易に霊 (ravān) に達する。

また、以下のことも知るが良い。体の手綱は霊 (ravān) の手のうちにある。以下に示されるように知るが良い。善き宗教 (Beh Dīnī) [ゾロアスター教の別称] は、悪行者、泥棒、その他の悪に帰される行為を為す者がどこに行くかを考えている。例えば、悪魔的行為即ち悪の諸行為からは、全ての人に苦しみが届く。今述べたこれら [義務としての実践的] 行為 (kār) を行うべし。この悪魔たちの命令が、体の中に持ってこられると、どうすべきか？ 正しい道とともにある宗教の無い者らをどう呼ぶべきか？ どんな原理 (aṣl) に真理 (haqq) はあるのか？ 私は説明しよう。どんな悪の性質 (manesh) も、聴くこと (gūsh)、行為 (konesh) も、善き宗教 (Beh Dīnī) に帰すことはできない。そして、世界を繁栄¹³⁴⁸させる。水、草、こういった類のものを善きものとする。

故に知るがよい。霊 (ravān) の命令を。[義務としての実践的] 行為を行うのである。知るが良い。肉体は善と悪から遠い。それにはいかなる懲罰 (pādafrāh) もない。しかし、肉体の中にある霊 (ravān) は、芳香 (būy)、意識¹³⁴⁹、フラワフル (frawahr) の命令により、預言者 (peyghambar) に従って行動する。貴方を [悪なる] 道に連れていく悪魔の命令に従ってではない。人間を道から連れていく [道を踏み外させる] 悪魔らの名前は、以下の

1348 MünchenとNavsariの異読に従い、آبادانیでとる。

1349 MünchenとNavsariの異読に従い、هوشでとる。

とおりである。我々が今まで述べたアーズ (Āz)、ニヤーズ (Niyāz)、キーン (Kīn)、ワラン (Waran)、ハサド (Ḥasad)、ボフターン (Bohtān)、アルシャク (Arshak)。以上のものであり、他にもまだある。本を読んでいけば、天使と悪魔の名は1つ1つ明らかになっていく。

